

中高ドイツ語 *haben* 完了の意味表出について

— 改新後の発展とその特異性¹⁾ —

金子哲太

〈Kurze Inhaltsangabe〉

Mit seiner Erneuerung im Althochdeutschen tritt das *haben*-Perfekt in die Geschichte ein, indem die eigentliche Fügung syntaktisch-semantisch neu organisierte Konstruktion erlangte: Dem ehemaligen Vollverb *haben* blieb seine Leistung als finites Verb völlig übrig, während seine lexikalische Bedeutung „Possessivität“ verblichen war. Dem Partizip Präteritum des transitiven Verbs geschahen hingegen die polare Abwechselung von der passivischen Funktion zur aktivischen und daher die Funktionierung zur Bezeichnung der Handlung des Agens. Die neue Verbform gewann also ohne formale Beziehung die semantische Verbindung mit dem Subjekt.

Im vorliegenden Beitrag handelt es sich um den zeitsemantischen Wert in seiner Verwendung im Mittelhochdeutschen. Als Text wurde das Heldenepos „Nibelungenlied“ ausgewählt, anhand dessen ich jeweiligen Kontext genau prüfende Analyse durchgeführt hatte. Auffallend ist es vor allem, dass bis dahin zur Formierung durative Verben zur Verwendung kamen und dass es Zunahme der Gebrauchsfälle mit der adverbialen Bestimmung gab, die besonders ermöglichte, die unbestimmte Vergangenheit oder auch die Durativität der Verbalhandlung zu präzisieren.

Aus der Untersuchung wird geschlußfolgert, dass das *haben*-Perfekt zu dieser Zeit doppelte Funktion zur Verwirklichung brachte: Das finite Verb *haben* bezeichnet einerseits die deiktische Gegenwart, die sich für den kontextuell bedingten Zeitablauf geeignet, das Partizip Präteritum ist aber andererseits zuständig dafür, die Vergangenheit immerhin sowie bestimmte Aspektualität zu bezeichnen. Die periphrastische Verbform kam also zwar zu der an sich fremden Fähigkeit, die Valenz des Vollverbs auszuüben, aber war jedoch noch nicht in der Lage, die Verbalhandlung zur temporalen Beziehung im Kontext passend zu setzen, weil das Partizip Präteritum wahrscheinlich die Grenze des nominalen Wirkungsbereichs nicht überschreiten konnte.

0. 問題提起

ドイツ語の *haben* 完了の歴史を振り返るとき、我々は少なくとも最古層の古高ドイツ語期にまで視点を移すことができる。本動詞 *haben* と過去分詞のあいだに起きた「再分析」(Reanalyse)がその出発点とみなされる。4 項の構成要素 (S-V-O-C) のうち、*haben* と補語の過去分詞があらたな関係を結ぶことによって一つの動詞単位が生み出され、文構造としては3項に減った

(S-V-O) と考えることができる。つまり受動態のように2語で一つの働きをになうようになる。その際、定動詞 *haben* のほうは語彙の意味を失うことで文主語とのあいだで結ばれていた意味関係は絶たれ、機能化することになる。他方で、(他動詞の) 過去分詞においては本来の受動的意味は失われ、これとは正反対の能動的关系を文主語とのあいだで得ることになる。この迂言的動詞構造において、意味的な重心は *haben* から過去分詞へと移行し、文意味の核を形成する要素は過去分詞となった。

この改新は、ざっと見ただけでも、とりわけ過去分詞には大きな負担を強いられる構造的転換であったことが容易に見てとれる。次に、過去分詞に注目して、その機能や意味作用領域がどのように変わったかについてより詳細に整理しておきたい。

対格目的語との受動的関係が、主格主語との能動的关系へ移行するというプロセスにおいてまず見逃してはならない点は、意味レベルでの関係化である。例えば *Ich habe das Buch gefunden* は、もともと「私はその本を見つけれられた状態で所有している」ぐらいの意味を持ち、過去分詞 *gefunden* の守備範囲は *das Buch* とのコブラ的关系において「本が見つけれられている」という結果的状态だけであった。「誰が見つけたのか」は表示されずここでは問題にはならない。再分析を経て、対格目的語とではなく主格主語 *ich* との意味関係を直接結ぶようになるとは、まず行為をつかさどる行為者が介在してくることを意味する。統語的に見れば、動詞 *finden* は行為者 („*ich*“) との関係を生み出すが、同時にまたさらに行為が及ぶ対象 („*das Buch*“) をも自らに取り込むことになる。言いかえれば、その都度使用される動詞は、自らのヴァレンツをいかに展開させることによって、そこで起きている事態を明確化する。他方、人称変化する定動詞は *haben* のままであり、主格主語 *ich* と統語上の関係を結ぶ。すなわちこの形式は、文法的機能を *haben* に残したまま、定動詞の働きを何ら持たない過去分詞が、主格主語とのあいだに「行為」と「行為者」との能動的关系を結ぶことで動詞の事態を明示するという特異な文構造を持つようになり、また今日までその機能配分を残すに至っている。

また、過去分詞が文法表示をしないながらも他の要素とともに事態を表すようになるとは、過去分詞が文レベルでの意味役割を果たすようになっていたことを含意する。すなわち次に指摘されるべき点として、過去分詞がになう意味作用領域が、対格目的語との関係においてのみであった局所的関係から、主格主語を取り込んだ文全体、すなわち命題レベルへと拡張することによって、事態にかかわる他の要素との関連が視野に入ってくることが挙げられる。過去分詞によって生み出される行為の完結性や結果性等の文法機能、またのちに共起するようになる副詞句による時間表示との関連は、文の時間性やアスペクト性を扱うレベルである。

さらに、過去分詞が文全体の意味論をつかさどるということは、この形式の時間・アスペクト意味を考えると、文単位以上のレベルでの「意味的な整合性」を問題にしなければならないことを表す。とくに時間性は、文脈や発話状況における時間的環境との関連の中で扱われる必要がある。つまり、再分析前にはまったく関与してこなかったコンテキスト環境との開かれた時間的關係を視野に収めなければならない。この点は、命題内レベルの意味作用領域を超えた、テクス

トあるいは語用論レベルの意味を指す。

以上のように、過去分詞は、その守備範囲を大幅に広げ、本来にない得ないレベルの意味表示を行う必要に迫られていたと考えることができる。またここで問われる意味とは、通常の時制形式で言うなら時制形態素の意味あるいは時制の意味用法に相当し、それらをどのように構成しつつあったかという問題に絡んでいることを認識させてくれる。しかしこの分析的形式的意味を追求する場合、むしろ *haben* の存在を忘れてはならない。脱語彙化するとはいえ、定動詞機能という重要な役割が果たされているからである。

次に、これら2つの動詞要素の意味論をふまえ、動詞カテゴリーの観点から再分析前後の変容をあらためて見ておく。「態」(Diathese), 「アスペクト性」(Aspektualität), 「時間性」(Temporalität) から整理すると次のような表ができる。

表1 <Semantische Änderungen über *haben*-Konstruktion im Althochdeutschen>

	Diathese	Aspektualität	Temporalität
vor der Reanalyse	Aktiv (+ <i>passiv</i>)	Zustand (+ <i>resultativ</i>)	Gegenwart (+ <i>vergangen</i>)
nach der Reanalyse	Aktiv	Resultativ ^{direkt} Resultativ ^{indirekt} Abgeschlossenheit	Vergangenheit Gegenwart

再分析前は *haben* が本動詞の働きを持っていたため、態は「能動」(Aktiv), アスペクト性は「状態」(Zustand), 時間性は「現在」(Gegenwart) と、その定動詞機能と動作相 (Aktionsart)²⁾ が中心的役割を果たした。他方で、共起する過去分詞は対格目的語との関係を結ぶのみであり、あくまでも副次的存在であった。使用される動詞は、他動詞でありかつ完了相動詞に限られていたため、動詞行為じたいはすでに完結したという意味で過去性を持つ一方、「～されたあとの状態である」という結果的意味を持つ。括弧内に示したこれらの意味要素「受動」(*passiv*), 「結果相」³⁾ (*resultativ*), 「過去」(*vergangen*) はしかし構文の根本的意味に何ら干渉を及ぼすものではない。再分析後に文意味の中心を構成する単位は、本動詞となる過去分詞である一方、*haben* が補助(動詞)的に関与してくる。古高ドイツ語期に現れる例のアスペクト性と時間性については金子(2015)で考察がなされたが⁴⁾, 中高ドイツ語の状況との比較を行うため、あえて整理しておく。なお、過去分詞が態の転換を起こすことについては立ち入らないことにする。

アスペクト性についてはすでにその多様化が見られる。過去分詞に使用される動詞は、古高ドイツ語後期までは完了相動詞なので、その結果相表示機能からは、次の表に図示したように、文としても結果相 (Resultativ^{direkt}) が見込まれる(図1タイプa)。たとえば(1)では、動詞 *gistriunen* は „gewinnen“ を意味するが、これは話者(=主格主語)との関係で結果的意味を持つことが分かる。一方、明確に完了相動詞とはみなせない動詞の場合、たとえば(2)の *zeigôn*

„zeigen“, (3) の *einôn* „übereinstimmen“ のように、単なる行為の完結性⁵⁾ (Abgeschlossenheit) 以上の意味は決して明確ではないこともしばしばある (図 1 タイプ c))。しかしまた (4) に見られるようにコンテキストとの関係から間接的に見込まれる結果的意味 (表中の Resultativ^{indirekt}) の場合もある (図 1 タイプ b))。„sich sorgen für“ を表す動詞 *bithenken* は、完了相動詞とは言えないが、この箇所では結果的な意味が感じられる⁶⁾。

図 1 <Drei Aspektualitätsarten der *haben*-Konstruktion im Althochdeutschen>

- a) Resultativ^{direkt} [z. B. *haben gistriunit* (1)]
 | >>>>>>>>>>> |
 perfektisches Verbalereignis Zustand des *direkten* Resultats
- b) Resultativ^{indirekt} [z. B. *eigan bithenkit* (4)]
 | >>>>>>>>>>> |
 perfektisches Verbalereignis Zustand des *indirekten* Resultats
- c) Abgeschlossenheit [z. B. *haben gizeigot/gieinot* (2), (3)]
 | >>>>>>>>>>> | (kein Resultat)
 perfektisches Verbalereignis

金子 (2015 S. 112) より

- (1) *senu nu andero fimui ubar thaz **haben gistriunit***. (Tat.149.4) ご覧ください、今や私はそのうえ別の 5 (タラント) を手に入れました。
- (2) *Thoh **habet** er uns **gizeigot**, joh ouh mit bilide gibot, / wio wir thoh duan scoltin, oba wir iz woltin*. (Otf.III.3.3) しかしそのお方は我々がそれを望むときに、どのようにふるまえばよいのかということを我々に教えてくださったのだ、例をもって示してくださったのだ。
- (3) *Nu thie ewarton bi noti machont thaz girati, / joh Kristes todes thuruh not ther liut sih **habet gieinot***. (Otf.IV.1.2) いま司祭たちは熱心にその計画を進めている。そして人々は必然的にキリストを死に至らしめることに意見が一致したのである。
- (4) ***Eigun** sie iz **bithenkit**, thaz sillaba in ni wenkit* (Otf.I.1.23) 彼ら (ギリシア人やローマ人) は一つも音節が欠けることのないように気を配ったのです。

時間的表示については、二層で構成されていたと考えられる。所有性を消失させた *haben* は、その定動詞機能を残しているため、時間性としては、「現在」(Gegenwart) であると推察される。現在完了文が用いられるコンテキストは、出現環境についての調査 (表 2 参照) が示すように、古高ドイツ語 (Ahd. < Althochdeutsch) でも中高ドイツ語 (Mhd. < Mittelhochdeutsch) でも現

在的環境が基本であると言える。他方で、過去分詞が表す行為は、行為者との関係ができてからはつねに過去の意味 (Vergangenheit) を帯びる。すなわち、(1) や (4) では結果的な意味 (「5 タラントを持っている」「音節が欠けていない」) が含意されるものの、行為者が当該の行為を過去の世界において行った (「私は手に入れた」, 「彼らは気を配った」) という前提もまた前景化されている。この形式はこうして、文意味に及ぶ定動詞の文法機能として「現在性」を表示する一方で、名詞形容詞範疇である過去分詞本来の意味作用領域を超えて「過去性」を表示するようになっていたと想定することができる。

表2 <Vorkommenstendenz des Perfektsatzes in der präsentischen Umgebung⁷⁾>

	Ahd.		Mhd.		
	Tat.	Otf.	a.H.	Nib.	Kud.
präsentisch	100% (7/7)	89% (39/44)	98% (41/42)	90% (326/363)	96% (166/173)

金子 (2013 S. 114) より

したがって、*haben* は意味レベルでは脱語彙化が進む一方、形態・統語レベルで人称と数の表示という定動詞機能を発揮しているが、文法的機能としては現在時制性を残していることが推測される。この定動詞の「現在性」に整合すべき意味として、過去分詞からは結果状態的な意味を供給するのがふさわしいはずであるが、上で見たように、古高ドイツ語の例を見ると、むしろ動詞行為の「過去性」のほうがつねに表出されていることは明らかである。

以上見てきたように、*haben* 完了の歴史において、外面的には古くから一つの統語的、意味的単位を形成していたことは明らかであるが、2つの構成要素は本来的に折り合わない点があるばかりでなく過去分詞では本来の機能からかけ離れた意味寄与を行っているため、その文法性については、我々がふつう *hab-* + 過去分詞に求めるような機能を想定することはできない。本稿は、この形式の姿を通時的に追跡していくという課題のもと、コンテキストを視野に入れて分析される意味用法を形式との関係で考察することに主眼が置かれる。歴史的資料にもとづく意味分析は、一時代下った中高ドイツ語期⁸⁾に現れる諸例において行われ、古高ドイツ語期に想定される意味表出との関係を視野に収める。例文分析は『ニーベルンゲンの歌』からの諸例で行われる。

1. 過去性

1.1 動作相の拡がり

再分析後に行為者と行為という関係が成立するようになることは、背後に隠れていた出来事が前面に現れ出ることを意味するが、これにともなう時間性は過去性である。ここではその都度の

出来事を構成する動詞の動作相を大まかに3種のアスペクト性に分類して整理しておく。すなわち中高ドイツ語において過去の意味を持った事態がアスペクト的にはどのような様相を呈していたかを見ておきたい。

1.1.1 明確な完了相動詞

ここでは、明確に完了相と考えられる動詞の例を挙げておく。完了相とは、動詞の事象にある限界点を想定し、その境界を超えることで終えるか、あるいは始まるかを表す動作相であると考えることができる。したがって2つの局面を想定し、その間の移行があるかどうかという基準設定と考えることもできよう。(5)の *hât gevangen* を用いた文は、ザクセン軍との戦いにおいてジーフリットが自分の手でリウデガスト王とリウデゲール王を捕虜にしたことを使者がクリエムヒルトに伝えている文である。*vâhen*「捕虜にする」という動詞行為はまさに限界点を越えることで成立する完了的行為を表しているが、実際にはブルグント国へ連行しているという意味が含意され、結果的意味をも表している。古高ドイツ語期から用いられていたタイプの最も古い動詞グループである。(6)の *erfinden* „wahr nehmen“, (7)の *verliesen* „verlieren“のほか、*gewinnen* „für sich gewinnen“ (289.4) や *erslâhen* „erschlagen“ (1110.3) などが挙げられる。

- (5) *nu hoeret mîniu mære, edeliu kûneginne hêr. / si hât gevangen beide diu Sîvrîdes hant.*

(Nib.238.1) さあ私の話をお聞きください、高貴な王女殿。彼ら二人をジーフリット殿が捕らえたのです。

- (6) ›Sô wol mich dirre mære‹, sprach Albrich daz getwerc. / ›nû hân ich wol erfunden diu degenlichen werc, / daz ir von wâren schulden muget landes herre wesen‹. (Nib.500.2) 「これはなんと喜ばしいことか。」このように小人アルブリーヒは言った。「私は勇士にふさわしい業をしかと見届けました。あなたはまことにこの国の領主であるのにふさわしい。」

- (7) *von Prûnhilde krefte den wæn' wir hân verlorn.* (Nib.552.3) プリュンヒルトの臂力によって我々は彼を失ってしまったのではないかと恐れているのでございます。

1.1.2 明確な継続相動詞

他方で、古高ドイツ語後期から徐々に現れるようになる純粋な継続相動詞は、中高ドイツ語期に入ると、その使用を増加させることは良く知られている⁹⁾。この場合、2つの局面はもとより想定されないため、限界点を越えるといったプロセスもない。表されるのは、ある時点から現時点まで継続して続く状態であり、ここで完了性や結果性は感じられない。(8)では *behalten* は「保ち続ける」(„unverletzt bewahren“) という意味である。(9)では *folgen* „folgen“, (10)の *tuon* は、直前の動詞 *minnen* „lieben“ の代動詞であり *hân geminnet* と書き換えられる。しかし、継続相動詞であっても¹⁰⁾ 文のアスペクト性としては意味が異なる場合もある。(11)において *werben* は、「自分の目標のため何かを勝ち取る努力をする」(„für seinen Zweck zu gewinnen

suchen“) という意味を持つが、完了形を用いることでその行為はグンテルがブリュンヒルトを手に入れるという目標を果たしている結果的状态にあることが分かる¹¹⁾。

- (8) nu sagt mir, kumet uns Kriemhilt? **hât** noch ir schoener lip / **behalten** iht der zûhte, der si wol kunde pflegen? (Nib.771.3) さあ教えてください。クリエムヒルトは我々のところにやってくるのでしょうか。あの美しいお方は、かつて十分に持ち合わせていたあの慎ましさをまだ保っておられるのでしょうか。
- (9) wir suln in langer dienen, den wir alher **gevolget hân**. (Nib.699.4) 私たちがずっとこれまで仕えてきた方々にこの後も奉仕するのだ。
- (10) Er gedâht ouch manege zîte: ›wie sol daz geschehen, / daz ich die maget edele mit ougen müge sehen? / die ich von herzen minne und lange **hân getân**, / diu ist mir noch vil vremde ...‹ (Nib.136.3) 彼はまた何度も考えた。「どうすれば、私がこの目であの高貴な乙女を見ることができるのであろう。私が心から愛しており、もう長い間想いつづけてきたそのお方は私には今もなお全く見知らぬ人なのだ…」。
- (11) lât wizzen mîne bruoder, wie wir **geworben hân**. (Nib.537.3) 私の兄妹には、私たちがどのように成功を収めたのかを知らせてやって欲しい。

1.1.3 曖昧な例

中高ドイツ語では、動作相やアスペクト性を認定することが困難なケースも増える。それは、一つの動詞が異なる意味用法で現れる場合がある一方、動作相が比較的明確であっても *haben* 完了によって本来的ではない意味を得ることがあるからである。たとえば、(12), (13) に現れる 3 つの *sagen* は、Brackert の現代語訳では順に „erzählen“, „berichten“, „Neuigkeiten melden“ で訳されている。(12) に見られる 3 名の王とはグンテル王、二人の弟ゲールノート、ギーゼルヘルのことであるが、第 4 詩節ですでに言及している内容であるため、挿入句として補足しようとする場合、語り手は過去の意味を取り入れなければならない。ここでの *gesaget hân* は過去の一回限りの出来事を述べているにすぎないため、アスペクト性としては完結性と特徴づけられうるが、これとて積極的な意味付けとは言えないであろう。他方で、2 つ目の *hât gesaget* では、3 人の王に使える従士たちの誉れについても連綿と語り継がれていることが表されている。語られるという行為が繰り返しなされてきているという意味で、継続の意味が現れている例であると言える。「知らせを伝える」という意味で用いられている (13) の *hâst geseit* はどうであろうか。これはアスペクト性としては、古高ドイツ語で見たような間接的な結果相と考えることができる。使用者がクリエムヒルト王女から報酬をもらえるのは、身内の軍勢の勝利、勇士たちの数々の武勲、そしてとくにジーフリトの安全という (良い) 知らせを伝えた結果によるからである¹²⁾。動詞の意味用法の多様性は、語としての動作相あるいは文レベルのアスペクト性の曖昧さに関係してくる。このような用例では、各々の動詞がどの用法で用いられているのか、その際どのようなアス

ベクトルが現れているのかを、その都度のコンテキストの中で判断する必要がある。こうした例は、(14) の widersagen „Fehde ankündigen“ に限らずその数は少なくない¹³⁾。

- (12) Die drie küene wâren, als ich **gesaget hân**, / von vil hôhem ellen. in wâren undertân / ouch die besten recken, von den man **hât gesaget**, / starc und vil küene, in scarpfen strîten unverzaget. (Nib.8.1/3) その3人の王は、私が述べた通り、非常に剛腕な力の持ち主であった。彼らにはまた、伝えられているところによると、きわめて優れた戦士が仕えていた。彼らは力強くまたとても勇敢であったし、はげしい戦いにおいても怯むことはなかった。
- (13) Dô sprach diu minneclîche: ›du **hâst** mir wol **geseit**. / du solt haben dar umbe ze miete richiu kleit / und zehen marc von golde, die heiz' ich dir tragen.‹ (Nib.242.1) そしてその優しい王女は言った「そなたは私に良い知らせを伝えてくれた。その褒美にそなたは立派な衣装と10マルクの黄金を受け取りなさい。それを私はそなたのところへ持っていくよう命じます。」
- (14) disiu suone diu ist mir harte leit. / iu **hât** der starke Sîvrit unverdîenet **widerseit**. (Nib.116.4) そのような和解策、それは私にはひどく惨めなものに思われる。剛腕のジーフリトは言われなくそなたに戦いを挑んだのですから。

以上、使用される動詞の動作相について言うならば、本来的ではない継続相動詞の増大がとくに指摘される。動詞のヴァリエーション化は、形式上の拡充化であるとも呼び得る。しかし、それは他方で、決して機能化を意味することにはならない。ここで見てきたように、文における元来の結果相の意味は、動詞の動作相に依拠するだけではないし、また、継続の意味もコンテキスト要素との関連から生じていることがうかがわれる。形式が一定のアスペクト意味を供給するわけではないという点で、むしろ逆に「機能」という言い方はできないとも言えるであろう。Leiss (1992) は、とくに継続相動詞の使用増加が、この形式の時制化、すなわち「過去化」を指すと述べている¹⁴⁾。さまざまな動詞を受け入れるという意味では「拡充化」である一方、意味表出のうえでその多様性に一定の意味付けがなされないのであれば「過去化」が進んでいると言わざるを得ないのかも知れない。

1.2 不定の過去指示副詞の共起

中高ドイツ語期に入ると、それまで現れなかった時間副詞(類)が現れるようになる¹⁵⁾。一つ目は、不定の過去を表す *ie* や *ê* (いずれも「かつて、これまで」) や *nie* の使用である。これらの副詞(類)は動詞行為の完了性や結果性とは折り合わない。たとえば、(15) なら、ブルグントの宮廷でジーフリトの行列が近づくのを目の当たりにし、グンテル王が忠臣ハゲネに「彼らをこれまでに見たことがあるかどうか」を問う場面であるが、*sehen* 「見る」が表す動詞行為のあ

り方やプロセスは問題となっていない。(16) では、一騎打ちで命を落とした辺境伯リュエデゲールの生前の誠実なふるまいが動詞的表現 *hât begân* („hat getan“) によって表されている¹⁶⁾。このような副詞(類)によって関係づけられる対象は、動詞の動作相やアスペクト性というレベルではなく、行為者と行為で結ばれる事態である。不特定の過去時において、「見た後であった」とか「見てわかっていた」という関係は成立しないであろう¹⁷⁾。副詞(類)と動詞行為とのあいだには、事態が過去において一回的に生じた(あるいは一回も生じなかった)ことが示されているに過ぎない。すなわち事態という文単位の意味には「過去性」しか残っていないパターンであると言わなければならない。

- (15) *ez sint in mîme hûse unkunde degene, / die niemen hie bekennet. **habt** ir si *ie* **gesehen**, / des sult ir mir, Hagene, der rechten wârheite jehen.* (Nib.83.3) 私の城にここではだれも見聞きしない勇士どもが参上している。もし、ハゲネよ、そなたが彼らのことをかつて見たことがあるならば、そのことについてのまことの真実を言ってもらいたい。
- (16) *lât uns an im dienen, daz er *ie* **hât begân** / an uns vil grôze triuwe und an manegem andern man* (Nib.2262.3) 彼がかつて、我々やまたほかの多くの者たちに対してたいそう誠実に接してくださったことに対し、彼に報いさせてください。
- (17) *vor allen mînen mâgen sult ir die krône tragen / alsô gewalteclîche, als ir *ê* **habt getân**.* (Nib.1086.3) 我々のすべての身内の前でそなたは、かつてご自身がそうであったのと同じように宮廷で権勢ゆたかにふるまっていたきたい。
- (18) *ja suln niht verdeit / wesen unser mære, daz wir zen Hiunen komen. / im **hât** der küninc Etzel *nie* sô liebes niht **vernomen*** (Nib.1713.4) まことに、我々がフンの国に来ているという知らせを黙っておくわけにはいかない。エッツェル王はかくも喜ばしいことをこれまでまったく聞いたことがなかったというものだ。

次の例は、継続を表す副詞(類)をともなう例である。(19)の副詞 *lange* や *her*, (20)の *von kinde* („von Kindheit auf“)¹⁸⁾、また(21)の *sît* („seitdem“) 文による例であるが、行為の反復を表す *dicke* („oft“)をともなう(22)もここに入る¹⁹⁾。これらの用例は、過去のあるときから現在時までずっと続く状態の継続性あるいは反復性を示す例である。限界点をを超えていないという点で、1.1.2.で挙げた継続相動詞を用いた例と同じように、完了アスペクトとはかけ離れている。現代語では現在時制となるところである。下に挙げた例のうち、(19)の *pflegen* „bewahren“ は動詞の動作相から判断してもその継続性は比較的明確であるが、(20)の *erkennen* „kennen“ や(21)の *dienen* „dienen“ に見るように、動詞の意味として継続性を持ち合わせているとは断言できないこともあり、その場合、副詞(類)が文のアスペクト性を決定づけていると考えられる。この種の副詞(類)は、動詞行為の継続性を明確化したり、ある程度規定化する働きをしていることが見て取れる。しかし元来の完了性や結果性とは直接的には関係してこず、

継続性のほかは「過去性」という時間性が残る。

- (19) Wie het ich daz verdienet, ... / des mîn vater *lange* mit êren **hât gepflegen**, / daz wir daz solden vliessen von iemannes kraft? (Nib.112.2) どうして、私の父が名誉を保って長い間守ってきたものを一人の男の力によって我々が失ってしまうなどということ招いてしてしまったのだろうか。
- (20) wem ist nu bekant / under iu bî Rîne die liute und ouch daz lant? / ... / ich **hân erkant von kinde** die edelen kûnege hêr. (Nib.1147.4) そなたらの中でライン河畔の人々や国のことを知っているものはおらぬか。(…) 私は非常に高貴な王族のことを幼少のころから存じ上げております。
- (21) ›die suln mit mir rîten in der Hiunen lant. / die nemen schaz den mînen und koufen ros unt ouch gewant.‹ ... ›*sît daz ich alêrste iuwer gesinde wart*, / sô **hân** ich iu mit triuwen **gedienet**.‹ (Nib.1283.2) 「そのような人は私と一緒にフンの国に行ってもらいたい。そして私の財宝をもらい、また馬と甲冑をもらい受けなさい」。(…) 「私がはじめてあなた様の家来として仕える様になってからずっと、誠心誠意ご奉仕してまいりました」。
- (22) sô wil ich jagen rîten bern unde swîn / hin zem Waskenwalde, als ich *dicke* **hân getân**. (Nib.911.3) しばしば行ってきたように、私はワスケンの森へと熊やイノシシを狩りに行こうと思っている。

動詞の動作相や副詞（類）等の使用という観点から見ていくと、中高ドイツ語期の *haben* 形式は、元来の完了性、結果性とは相いれない継続的アスペクトを受け入れるようになっていた点が特筆される。一方で、アスペクト性が不明瞭な、単なる一回的な過去の出来事を表すに過ぎない例も古高ドイツ語期以上に増加したと見られる。ここで見てきた多様な用法は、動詞レベル、文法形式レベル、そして文レベルであった。すなわち、ここで確認してきた様々なアスペクト性を持つ「過去性」とは、命題内における時間性であると言える。それが時間指示（Zeitreferenz）と言えるかどうかは別として、この意味が命題外レベルでどのような時間関係を結んでいたのかについては第3節で考察したい。

2. 現在性

中高ドイツ語期では、過去表示手段はまだ過去時制（Präteritum）が優勢であった。この2つの形式の出現に関する頻度調査において、次のような興味深いデータが出されている。表 [A] は、『哀れなハインリヒ』（*der arme Heinrich*）[1190年頃成立]、『エルンスト公』（*Herzog Ernst*）[1200年頃成立]を用いて調査された過去時制と現在完了の用例数である。作品全体としては、予想通りまだ過去時制が圧倒的に頻繁に出現していることが分かる。ところが、会話文

に限定して両時制の分布をまとめた表 [B] を見てみると、両者の関係はかなり異なってくる。両時制の出現頻度が拮抗関係にあるどころか、『哀れなハインリヒ』では両者の数字が逆転し、現在完了の出現頻度が過去時制を凌いでいる。すなわち、表 2 で見た現在の環境への指向性とは、具体的に言えば、会話文における現在性を表すということを意味する。

表 [A] <Vorkommensdistribution der Vergangenheitstempora>

	Präteritum	:	Perfekt	Summe	(Anzahl der Belege)
Herzog Ernst	95	:	5	= 100	(2956 : 141 = 3097)
der arme Heinrich	90	:	10	= 100	(481 : 54 = 535)

表 [B] <Vorkommensdistribution der Vergangenheitstempora in der dialogischen Passage>

	Präteritum	:	Perfekt	Summe	(Anzahl der Belege)
Herzog Ernst	51	:	49	= 100	(142 : 136 = 278)
der arme Heinrich	46	:	54	= 100	(41 : 48 = 89)

Zeman (2010 S. 112/116), 黒田 (2012 S. 143/147) より

そして現在完了形じたいの出現分布を表している下の表 [C] を見ると、少なくとも中高ドイツ語期の叙事文学においては、この形式がまさに会話文の中で用いられるのがふつうであったということがうかがえる²⁰⁾。これまでに挙げた中高ドイツ語の例文 ((5) 以降) で言うと、(12) 以外はすべて、登場人物が話すセリフ部での使用である²¹⁾。会話文における現在性とは、たんに時間的な概念というだけでなく、話し手と聞き手が会話を繰り広げる場、すなわち発話状況という場所概念をとまなうものと考えてよいであろう。

表 [C] <Vorkommenshäufigkeit der Perfektform in der dialogischen Passage>

	Häufigkeit	Anzahl der Belege
der arme Heinrich	90%	(44/49)
Nibelungenlied	98%	(390/398)
Kudrun	94%	(173/184)

金子 (2013 S. 119) より

このことを示唆するデータが、次の表 [D] に現れている。中高ドイツ語では、現在完了を用いた文には 1/2 人称代名詞の使用が目立つ。この 2 つの人称は、会話の参加者を直接指示する直示表現 (Deixis) である。この調査は、主語代名詞だけでなく、斜格で表れる場合や所有冠詞

で表れる場合も含むものであるため、その指示性の強弱はある。しかしこれらの代名詞を用いることで、発話状況およびそこに居合わせる話し手あるいは聞き手が顕在化されていると考えることができる。こうした使用環境では、完了形式を用いた動詞行為あるいは事態は、会話の当事者との何らかのかかわりを持っていることを意味すると言ってよいと思われる²²⁾。

表 [D] <Tendenz zum Gebrauch eines bestimmten Personalpronomens im Perfektsatz>²³⁾

	Ahd.		Mhd.		
	Tat.	Otf.	a.H.	Nib.	Kud.
Pronomen in der 1./2. Person	57% (4/7)	47% (27/58)	82% (40/49)	79% (315/398)	82% (150/184)

金子 (2013 S. 117) より

このことに関連してさらに、中高ドイツ語期の現在完了が（広義の）話法性を含むコンテクストへの指向性も示していることが、次の表 [E] から見て取れる。言語指標としては、表 [F] に示したように、いわゆる話法の助動詞、接続法、命令法、否定表現などが挙げられる。

表 [E] <Affinität des Perfektsatzes zum modalfärbigen Kontext>²⁴⁾

	Ahd.		Mhd.		
	Tat.	Otf.	a.H.	Nib.	Kud.
im modalfärbigen Kontext	71% (5/7)	61% (22/36)	89% (32/36)	87% (266/306)	87% (111/127)

表 [F] <Modalitätsindikatoren im Kontext des Perfektsatzes im Nibelungenlied>²⁵⁾

Modalverb	103	
Imperativ	24	
Konjunktiv	25	(+10)
Negation	24	(+18)
andere	90	(+26)
Summe	266/306	(+54)

金子 (2013 S. 122f.) より

すでに挙げた (15) で見てみるならば、*habt gesehen* をともなう条件節のコンテクストは *des*

で始まる帰結文となるが、ここに話法の助動詞 *sult* が用いられている。この *des* が受ける条件節の内容（についての真実）を、話者であるグンテル王は「言ってもらいたい」（*sult jehen*）と述べている。(17) でも *haben* 完了文は、要求文 *sult krône tragen* をともなう主文に従属的に関係している。ジゲムント王（＝話者）の要求は、クリエムヒルト王女がジーフリトの故国で権勢ゆたかにふるまってもらいたいというものであったが、比較対照としてジーフリト生前時のありようを引き合いに出す際に *habt getân* が用いられている。また、並列的な接続関係にある例として、たとえば (5) の、コンテキストになっている命令文 *hœret*（「聞いてください」）による要求は、ジーフリトが二人の王を捕らえたという内容に対して注意を喚起させている。(14) では、メッツのオルトウィーンが遺憾である（*ist mir harte leit*）理由として、続く文でジーフリトがブルグント国を奪おうとやってくるからと過去の事態（*hât widerseit*）を挙げている。これらの箇所では、話者の態度や感情が、当該の事態に対し直接的にかかわっている。現在完了を用いた文の内容と関係の仕方の違いやその強弱にはここでもやはり差がある。しかし、取り扱われる過去の事態に対し、話し手の役割を担う人物が何らかの主観的な態度をとっていることが見て取れる²⁶⁾。

ここで見てきた、出現分布の偏り、代名詞の使用傾向、またコンテキストにおける特徴から、中高ドイツ語期の現在完了が好む現在のコンテキストは、次のような特徴を持っているとまとめられる。それは、客観時あるいは基準時としての現在というだけでなく、発話の起点である発話状況が顕在化している場であることと、発話状況の基本構成要素である「わたし」「いま」「ここ」のうち、「わたし」すなわち話者の態度が現れている場面での使用傾向を示していることが分かる。

3. 過去性と現在性

さて、中高ドイツ語の *haben* 完了は、多様なアスペクト性を持った過去の事態を表す一方、発話状況が顕在化し、そこで話者の何らかの態度が現れているパターンでの出現傾向を示しているのではないかと指摘した。この「過去性」と「現在性」が *haben* 完了を用いた文の中でどのように構成されているのかがこの節のテーマである。ところで、歴史的話し言葉性について研究している Zeman は、中高ドイツ語の現在完了と過去時制との関係について次のように述べ、またその機能について図式化を試みている。本節では、本稿の主張と部分的に軌を一にするとところがあるその提案に鑑みながら考察を進める。

Der funktionale Unterschied zwischen Präteritum und Perfekt kann damit insbesondere darin gefasst werden, dass das Perfekt Verbalereignisse innerhalb einer indefiniten Vergangenheit bezeichnet, die in einer direkten Verbindung zur deiktischen Origo stehen, während das Präteritum Verbalereignisse bezeichnet, die lokal-temporal in einer definiten 'past-time'-Welt

verankert sind. (Zeman 2012 81f.)

過去時制と現在完了との機能的な相違はそれゆえとりわけ次の点において理解される。すなわち現在完了は、直示的オリゴ（die deiktische Origo）へ直接的に関連付けられている動詞事象を非限定的な（indefinit）過去の内部で表すのに対し、過去時制は、限定的な「過去時間」世界（definite ‘past-time’-Welt）において時間・場所的に固定される動詞事象を表す。

図2 <Gegenüberstellung der unterschiedlichen Semantik und Verwendungsweise von Perfekt und Präteritum>

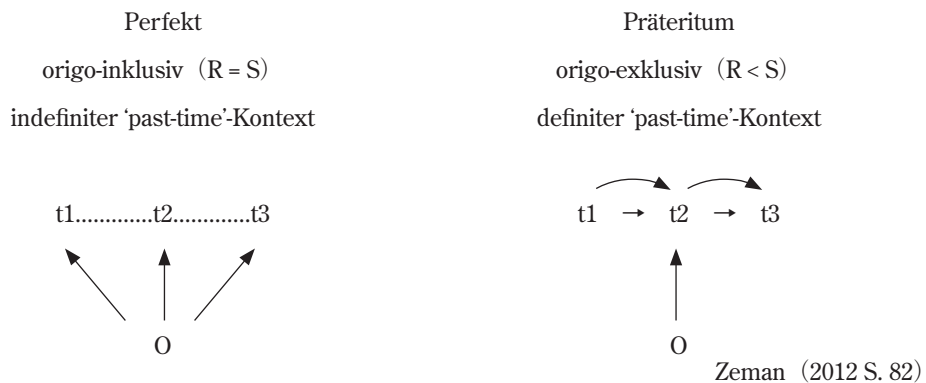


図2において、過去時制で t1, t2, t3 が実線矢印で結ばれているのは、出来事の継起が時間的流れの中で進んでいることを示す一方、現在完了に見られるそれが点線で記されているのは、それぞれの出来事がお互いに直接的関係を結んでいないことを示している。現在完了でオリゴ内包的（origo-inklusiv）とあるのは、それぞれの出来事と発話の起点（＝オリゴ）が直接的な関係を結んでいることを表す。ライヘンバッハの時間概念を用いれば、発話時点を参照時点として出来事を眺めるという直示関係が成立している（Referenzzeit = Sprechzeit）ことになる²⁷⁾。過去時制の場合にオリゴ排除的（origo-exklusiv）とあるのは、出来事が発話の起点と直接的な関係を結ぶのではなく、発話時点以前に位置する参照時点から間接的に眺められる（Referenzzeit < Sprechzeit）からであると考えられる。

この記述モデルが我々にとって重要なのは、現在完了において発話の起点からその都度眺められる出来事が非限定的（indefinit）であるという点である。過去時制の場合、出来事の過去性はコンテキスト内で他の出来事とのかかわりの中にあるという点で限定的な過去（definite Vergangenheit）である一方、現在完了では、出来事は過去の世界の中から特定されずに取り出される。これは言いかえると、過去の出来事が、継起する他の過去の出来事から切り離されてあるいは別個に扱われることを意味し、それゆえ非限定的過去世界を示すコンテキスト（indefiniten ‘past-time’-Kontext）を作ると想定されている²⁸⁾。この点については、haben 完了が現在的環

境というコンテキストに現れるという冒頭で提示した調査結果がすでに語っている。そこにはもとより過去世界は存在しないし、非過去のな世界から、限定的な過去性を帯びた過去の出来事を取り出すことはできないからである。また第1節で、過去の事態についてのアスペクト性や時間性について見てきたが、その都度の動詞行為や事態は一つの単位で個別的に扱われるものであることは明らかである。言い表される動詞行為や事態から見れば、それは文単位内にとどまっていると言える。

それでは、時折見られる、*haben* 完了が連続して用いられる場合はどうであろうか。(23)は、ハゲネの謀略が描かれる場面であるが、クリエムヒルトはねつ造された戦に出征する夫ジーフリトの身を案じハゲネに警護を嘆願するようになる。最初の条件節内では、クリエムヒルトが夫自慢をした (*hab' getan*) ことを遠回しに言っているが、そのことが理由で彼が責められる (*sol des niht engelten*) ことにはならないよう望んでいる。彼女の行き過ぎたふるまいは、続く発言の中の彼女が後悔している (*hât gerouwen*) ことと内容的には関連するが、言語表現上直接的関係を結んではない。また、ジーフリトから打擲された (*hât zerblouwen*) ことは、時間的な流れの中に置かれなまま、彼からきつい罰を受ける羽目になった (*hât errochen*) と表現を変えて繰り返されている。このように *haben* 完了を用いた部分は、互いにまったく時間的關係を結んでいない。(24)、(25)も同様に、完了形式が並んでいても、そこにいわゆる「語り」の世界に特徴的である時間的継起をともなっているわけではない²⁹⁾。

(23) er'n sol des niht engelten, **hab'** ich Prünhilde iht **getân**. / Daz **hât** mich sît **gerouwen** / ... / ouch **hât** er sô **zerblouwen** dar umbe mînen lîp; / daz ich iz ie geredete, daz beswârte ir den muot, / daz **hât** vil wol **errochen** der helt küene unde guot. (Nib.893.4, 894.1/2/4) 私がブリュンヒルトに対して何かをしでかしたとあってあの方が報復を受けるなどということにならないでほしい。あれ以来私はそのことで後悔しているのです。…そのことであの方は私をさんざんむち打ちしましたし、あの勇敢で優れたお方は私が彼女の心を苦しめるようなことを言ったことに十分に報いたのです。

(24) wie **ist** daz **geschehen**? / wand' wir iuch niulîche **haben** vrô **gesehen**. / nie niemen wart sô küene, derz iu **hât getan**, / heizet irz uns rechen, ez sol im an sîn leben gân. (Nib. 1764.1/2/3) 一体どうしたというのです。我々がついさっき楽しく顔を合わせていたというのに。もし誰かがあなた様を苦しめたのであれば、それほどに勇敢な男はこれまでいなかったというものだ。もし我々にそのことの報復を命じられるならば、彼の命はあってはならぬ。

(25) wer **hât** daz **getân**? ... daz **hât** der hêrre Blœdel unde sîne man. / ouch **hât** ers sêre **engolten**, daz wil ich iu sagen: / ich **hân** mit mînen handen im sîn houbet abe **geslagen**. (Nib. 1953.1/3/4) 誰がそれをやったのだ。…それはブレードル公とその家来どもです。しかし彼はまたそのことでひどい償いを受けることになったのだ。そのことを私はそなたに申し

ます。私はつまり、この手で彼の首を刎ねてやったのです。

さて、haben 完了を用いて表される出来事はまた、別の意味で非限定的であることが分かる。条件節内で用いられた (15) を再度見ておきたい。グンテル王は、自分が知らない軍勢が近づくのを見て、諸国に通じたハゲネに対し彼らについての知識を問いただす場面である。habt gesehen を用いた過去の動詞行為「見た」は仮定的内容であり事実ではない。「聞き手 (= ハゲネ) が彼らを見る」という事態が過去の領域においてかつてあったと考える話者は、その事実性を前提条件として話を進めている。同様のパターンは、(26), (27) である³⁰⁾。(26) は、クリエムヒルトがしでかした夫自慢について、ジーフリトがグンテル王にその潔白を告げる場面であり、当該文は「彼女が言った発言内容が事実であるならば」と言いかえることができる。過去の行為の事実性が問われている箇所である。

(26) und **hât** si daz **geseit**, / ê daz ich erwinde, ez sol ir werden leit [...] (Nib.858.1) もし彼女がそのようなことを言ったのであれば、私が事態を収めるまゝに、彼女を痛い目にあわせなければならぬ [...]

(27) Ich solz in gerne bûezen, swie si dunket guot, / **hât** iemen in **beswæret** daz herze und ouch den muot. (Nib.1862.2) 私は、もし誰かが彼らの心や考えを痛めつけたのであれば、彼らによいと思われるほどに、そのことに償いをするつもりです。

また、(7) に見られるように、推量の動詞 wænen „glauben“ を用いた文に代表されるような、推量の対象となる箇所に haben 完了が用いられることがある³¹⁾。使者ジーフリトに自分の兄グンテルの安否を問う場面では、クリエムヒルトは、王女ブリュンヒルトに打ち負かされて彼を失ってしまった (hân verlorn) のではないかと心配する。こうした箇所では、動詞行為や事態はやはり事実ではない。すなわち haben 完了を用いた文内容は、過去のコンテキスト時間と結びついていないばかりか、事実性から離れる場合もあることがうかがい知れる³²⁾。こうして、haben 完了によって表される動詞行為や事態には、たとえば si / geseit hân (「彼女が／言ったこと」)、wir / verlorn hân (「我々が／失ったこと」) のように、過去性を帯びた命題内容を想定することができる。

このように見てくると、haben 完了によって言い表される動詞行為や事態は、他のコンテキストとは直接関係を持たないというだけでなく、それじたい「過去」という物理的・客観的な時間性にもあまり依存していない個別の単位を構成しているとは言えないだろうか。次に述べるように「現在性」とのかかわりからも、それは過去性を帯びた命題単位であると想定できるように思われる。

第2節後半で、中高ドイツ語の現在完了が話法的コンテキストへの指向性を示すというところで少し確認したが、現在完了を現在的コンテキストとの意味関係で見えていくと、そこには過去の

な出来事が発話状況に居合わせる話者によって一定のパースペクティブで眺められるという構図が横たわっていることに気づく。現れ方としては、関係文や動詞の目的語文など上位文に接続する副文相当の場合と、ある文に続いて現れる文が並列的に継続する中で現れる場合とに分けられる。たとえば (9) では、関係文内冒頭の関係代名詞 *den „denen“* が人称代名詞 *in „ihnen“* に関係付けられる。王妃となったクリエムヒルトの申し出を断ってこれまで通り奉仕したい (*suln dienen*) というハゲネ (= 話者) の意思是、これまで仕えてきた (*gevolget hân*) 彼らすなわちグンテル王らに向けられる。(16) では、老ヒルデブラントは亡きリュエデゲールに最後に恩返しをしたい (*lât dienen*) のであるが、その要求は生前示してくれた (*hât begân*) 変わらぬ誠実さに対してである。話者 (= ヒルデブラント) の要求は、そこに向けられるのである。一方、(12) の 2 例 (*gesaget hân / hât gesaget*) は、上位文にはとくに話法的表現が現れていないが、どちらも「語り」の地の文に対し話者が追加的に補足説明を行っているケースである。この場合、「語り」の流れをストップさせて挿入文として割り込むという文体じたいから話者の一定の態度が現れていることが分かる。また (11) では、間接疑問文の形式をとる副文内容は *lât wizzen* 「知らせてやってほしい」対象となっている。このパターンでは、上位文に結び付けられる内容は、*haben* 完了文における動詞行為だけでなく命題全体 (*wie wir geworben hân* 「我々がどのようにして成功を収めたか」) であることは明確である。このように、過去の事態は発話状況に関係づけられていることは明らかであるが、その関係づけは話者の一定の態度を含むことがらの一部、あるいはことがらの説明のために必要な部分であったり様々である。

これに対し、並列的な文接続の例としては、(19), (20), (5), (6) などが挙げられる。(20) (*hân erkant*), (21) (*hân gedienet*) では順にグンテル王、エッツェル王と、どちらも対話相手からの要求に対する返答部分である。返答を迫られているという意味で、話者の何らかの態度が現れている箇所と言える。ただし (20) に関しては、当該文だけで返答となっているわけではなく、返答の中の冒頭部に *haben* 完了が用いられている例である。また (5) では、ザクセン軍との勝ち戦の様子に耳を傾けるよう使者がクリエムヒルトに促している場面であるが、ジーフリトが 2 人の王を捕らえた (*hât gevangen*) ことは「聞いてもらいたい」(*hoeret*) という要求の内容となっていると同時に、要求したことの理由にもなっている。(6) では自分を縛り上げたジーフリトの強さを褒めたたえる理由づける箇所でも当該文が用いられている。すなわち、話者 (= 小人アルプリーヒ) に嬉しい気持ちが現れている (*wol mich*) 理由は、ジーフリトの強さを見せつけられた (*hân erfunden*) からである。ここに挙げた例では、過去の意味を持つ命題全体が前文内容に結び付けられているが、発話状況で必要とされる発言そのものであったりあるいは話者の態度や心情に直接関係していることが分かる。

haben 完了に見られる動詞行為や事態が発話状況に関わる何かに関係づけられるという点は、本節前半で指摘した条件節内での例や推量をともなう例からも明確であるように思われる。Zeman のモデルには、オリゴーに関係付けられる動詞事象 (Verbalereignis) の規模について特に記述は見あたらないが、動詞行為だけでなく、行為者と行為、また時間副詞句をともなう命題

全体レベルでの出来事であると考えてよいであろう。ここには、1.2 節において見てきたような過去指示副詞を含んだ文単位がふつうに数え入れられるからである。「オリゴ-内包的な」指示体系のもとで結ばれる「非限定的な過去世界」における出来事とは、コンテキストから受ける発話状況（＝「現在性」）を視座として、そこから眺められる命題レベルの個別的出来事（＝「過去性」）であると言い換えることができるのではないか。

4. まとめ

中高ドイツ語の *haben* 完了の意味用法を共時的に見た場合、古高ドイツ語期に認められる二層の時間性が残っていることがうかがえる。しかし、用法や用例が増えたこの時期には、出現のあり方の点で一定の指向性が認められる。過去分詞で表される動詞行為は、使用される動作相の拡がりによってアスペクトの多様化を得る一方、一定の時間副詞類が共起することは、行為と行為者との関係でできる命題単位が時間的規定をより柔軟に受け入れるようになったことを示している。しかし実際には、その動詞行為あるいは事態は、限定的過去世界との関係を持たないばかりか、その事実性が不明確であることもある。そのような「過去性」を帯びる命題的出来事は、発話状況あるいは発話状況における話者の態度に結び付けられる。「現在性」とはこの場合、時間的概念であると同時に場所的な概念を含む発話の起点であった。

これらの意味特徴は次のように形態の機能に対応させることはできないであろうか。この形式が圧倒的に現在のコンテキストの中で出現することは、まさにその現在時制性が生きていることを示す一つの証拠であるが、そこは過去の出来事を眺める参照時点の役割を果たす一方、コンテキストから話法性を帯びた発話状況を受けとる場ともなっている。すなわち命題内外のレベルで役割を果たす「現在性」をになう機能を持つ。他方の過去分詞は、多様なアスペクトを持った非限定的「過去性」を供給するが、文レベル以上には届かない。コンテキストに依存しないという意味でそれがおよぶ時間性は命題内の閉じたクラスにあると言える。統語単位として一つのまとまりをなしている中高ドイツ語期の *haben* 形式は、語用論的にテキストとのかかわりを持ちつつ、各構成要素は文内レベルで意味表出するという機能的分担を行っている様子が見え隠れしているように思われる。

とくに過去分詞の閉鎖性について最後に指摘しておきたい。冒頭で述べたように、*haben* 形式は、古高ドイツ語期に再分析を起こし、その後過去分詞の態の転換（受動＞能動）によって使用動詞は行為者だけでなくその他の必須要素とも関係を結ぶことになった。それは使用動詞のヴァレンツが展開することを意味する。Ich habe das Buch gefunden で、対格目的語と局所的に名詞形容詞的にコプラ関係を結んでいた（das Buch ist gefunden 「本が見つかっている」）状況から、動作主と対格目的語との意味・統語関係を実現させるようになる（ich – gefunden – das Buch 「私が本を見つけた」）。この構造的転換にもかかわらず、動詞行為の時間性がコンテキストに対して閉じており、文内レベルでも非限定的であったのは、過去分詞の文法的機能が意味・統語上

の関係化に追いついていなかったことを表しているとは言えないだろうか。過去分詞が新しく対格目的語等と関係を結ぶことで完成させる述語的意味には人称や時制の形態マーカーをとまなわなかった。本動詞が潜在的に持っていた接合能力の展開と過去分詞に要求される新たな機能化のあいだには乗り越えられない壁が横たわっていたことが想起される。それはとりもなおさず過去分詞の本来的な機能である名詞形容詞性 (Nominalität) であろう。

注

- 1) 本稿は、日本独文学会京都支部 2017 年春季研究発表会 (2017 年 6 月 24 日 於: 立命館大学) にて「中高ドイツ語の *haben* 完了における視点について — Nibelungenlied に現れる例から —」とのタイトルのもとで口頭発表した内容にもとづくが、その主旨を変更し大幅に加筆・修正を施したものである。
- 2) 動作相 (Aktionsart) とは、「動詞によって表される出来事の経過のあり方や出来事の段階化 (die Verlaufsweise und Abstufung des Geschehens)」(Helbig/Buscha 1994 S. 72) とみなされ、動詞の語彙レベルでの意味論であるのに対し、ここでのアスペクト性 (Aspektualität) とは、それが動詞形態や共起する副詞等別の要素との絡みで実現される場合に用いることとする。
- 3) Resultativ (形容詞 *resultativ*) は「結果相」と訳すことができる。例えば Zeman (2010) では次のように定義づけている。「結果相 (Resultativ) というパラメーターは、完結性 (Abgeschlossenheit) の特徴を前提としている。それは同様に、動詞のアスペクト性 (Aspektualität) ないし二階層性 (Zweiphasigkeit) に依拠している…結果的意味とは、話者の現在へとなおも持続している後時的状態の階層 (Nachzustandsphase) の中で観察されうるものである」。(ibid S. 202)
- 4) 「再分析」前後の様相については、5 つ意味単位 (「現在性」「所有性」「状態性」「結果性」「受動」) をめぐって考察した金子 (2015) を参照のこと。
- 5) Abgeschlossenheit は「完結性」と訳すことができる。例えば Zeman (2010) では次のように定義づけている。「完結性 (Abgeschlossenheit) というパラメーターは、動詞による出来事 (Verbalereignis) の完遂を指すが、それは現在における結果性やその完遂からの持続とは無関係である」。(ibid S. 201)
- 6) Paul (1958 S. 137), Dal (1966 S. 121) らは、再分析後は徐々に過去の動詞行為をあらわすようになったと指摘する。一方 Eroms (2000 S. 28), Kuroda (1999 S. 60f./118f.usw.) らは「古高ドイツ語では *haben* + 過去分詞結合は結果相構文である」と主張する。タイプ c) のような例が少なくないため、前者の記述にとどめるべきであると思われる。
- 7) 古高ドイツ語の作品は、『タツィアーン』(Tatäin) [830 年頃], 『オトフリートの福音書』Otfriids Evangelienbuch [870 年頃], 中高ドイツ語の作品は、『哀れなハインリヒ』(der arme Heinrich) [1190 年頃], 『ニーベルンゲンの歌』(Nibelungenlied) [1200 年頃], 『クードルーン』(Kudrun) [1240 年頃] が調査対象となっている。表中の丸括弧内の数字は、分母が総用例数、分子が当該用例数、すなわち現在の環境にある用例数である。コンテキスト調査では、複数の過去分詞をとまなう例や連続して現在完了文が続く場合を一つの単位としているので、総用例数が、表 [D], 表 [E] とは異なる。
- 8) 中高ドイツ語期には、*haben/sein* による現在完了は、使用頻度や使用語彙を増大させ、いわゆる完了不定詞形や受動の完了形が現れるなど、形態上のパラダイム化が進む。
- 9) Kuroda (1999) S. 32/65f., 嶋崎 (2004) S. 141f., Paul (2007) S. 292f.
- 10) 『トリスタン』を調査した Kuroda (1999 S. 32) では次の動詞 *werben* は継続相動詞に分類され

ている。

- 11) Brackert (1993 S. 121) では „wie es uns ergangen ist“, Piper (1889 S. 121) でも „wie es uns gegangen ist“ と現在完了形を用いて訳されている。あるいは Grosse (1997 S. 167) の現代語訳では, den Erfolg unserer Werbung (「我々の求婚が成功したこと」) と名詞句で訳されている。
- 12) ただしここでは, sagen 単独の動作相ではなく, wol sagen という動詞句からできる動作相によって現れるアスペクト性であろう。
- 13) widersagen は, この例のほか, 例えば 2035.4 で「～に(停戦などの) 解消を告げる」 („aufkündigen“), 1213.1 で「他人の主張や自分のかつての主張に対し意義を唱える」 („dem widersprechen, was der andere behauptet oder was ich selbst früher behauptet habe“) という意味で用いられている。Vgl. BMZ II, 2 S. 22f.
- 14) Leiss (1992 S. 272) は, これをアスペクト表現から時間表現への展開であると指摘している。Vgl. Szcpaniak (2009 S. 135f.)
- 15) すでに挙げた (6) に見るように, 発話時点を表す副詞 nu („nun“) の使用もまた散見される。これは, さしあたって現在性を明示する働きを持っていると説明できるが, すでに古高ドイツ語期の例に見られるものである。このほか, 嶋崎 (2004 S. 167f.) が「近接する特定の過去を表す時間副詞類」として挙げているように, hiute („heute“) が現れることもある。「特定の過去を表す」と言えるが, むしろ nu と同様に(より広い時間幅をもつ) 現在性を表す副詞であると考え。これについては稿を改めて考察したい。
- 16) この動詞句を含む文は, Brackert 訳では „daß er uns und so vielen anderen Männern allezeit treu gewesen ist“, Grosse 訳では „was er uns und vielen anderen in sehr großer Treue immer getan hat“ となっている (Brackert S. 239 / Grosse S. 681)。「誠実さ」を繰り返し示したことになるので, 反復的な行為であるとも言えるが, ここでは過去の出来事を包括的に表していると考え。
- 17) ただし, テキスト解釈というレベルでは結果の意味を含意しているということではできる。(15) では, かつて聞いたことがあって「知っている」, (17) では, これまで聞いたことがなかったから「知らない」と訳することができる。
- 18) この例は, 代表的な中高ドイツ語文法書に「持続する時間」(durchstehende Zeit) を表す例として挙げられている。(Paul 2007 S. 292)
- 19) これまでの例では, (8) の noch, (9) の alher, (10) の lange がここに入る。
- 20) ただし嶋崎 (2004 S. 256) の調査から, 作品によってばらつきが見られることが分かる。とくに『パルツィバール』(第1巻～第10巻)では, 会話文における現在完了と過去時制の対比は 2:8 と過去時制の使用が圧倒的に多い。
- 21) しかし (12) は, 語りの中に語り手の補足説明が加えられている箇所であり, 話し言葉性は高いと考えられる。
- 22) 話者と動詞行為あるいは事態とのかかわりは, 疑問文や命令文など文のタイプや共起する推量の副詞類からも見えてくるが, ここではとくに特徴的な指標として(広義の)人称代名詞の出現を挙げた。
- 23) 表中の作品について, 数値の挙げ方等については, 注7を参照。総用例数が, その都度過去分詞に用いられた動詞の数と一致する。また, 本文でも言及したように, ここで言う人称代名詞とは, 主格や斜格のほか所有代名詞にも当てはまる, 1/2 人称性を含んだ代名詞という意味である。
- 24) 注7を参照。セリフ冒頭部や挿入文での用例は省いてあるため, 現在完了が現代的環境にあることを示した表2よりさらに総用例数は減っている。
- 25) 丸括弧内にあるプラス記号付きの数字は, 当該の指標が別の指標と共に現れる用例数で

- ある。たとえば Konjunktiv の 25 (+10) とは、接続法の指標が延べ 35 例現われるが、うち 10 例は、ほかの指標とともに現われることを指す。
- 26) より詳しくは金子 (2013 S. 121ff.) を参照。
- 27) 出来事時間 (Ereigniszeit), 発話時間 (Sprechzeit), 参照時間 (Referenzzeit) という 3 つの操作概念の位置関係から時制の意味を問う試みである。論理学から生まれた時制論 (Reichenbach 1957) であるが、現在でもしばしば用いられる。
- 28) Zeman の言うコンテキストとは、過去の出来事が時間的・場所的に (lokal-temporal) 位置づけられる「過去時間」世界 ('past-time'-Welt) を指し、時間意味論上想定されるべきレベルであると考えられるため、一般に言う言語的コンテキストとは必ずしも一致しない。現在完了の場合それが非限定的 (indefinit) であるとは、出来事の継起が前方照応的に (anaphorisch) 表される「語りの性質」(Narrativität) を持たないことによって特徴づけられる (Zeman 2012 S. 81f.)。
- 29) Zeman は、現在完了と過去時制との違いは、時間指示 (Zeitreferenz) ではなく、指示体系 (Referenzsystem) が異なる点にあると述べ、現在完了形が連続して使用される例を『デア・シュトリッカー』(der Stricker) から引用している (Zeman 2012 S. 80f.)。
- 30) こうした現れ方の現在完了は、Nib. で 13 例見られた (金子 (2009 S. 118))。条件節ではなく、これに対する帰結的な内容を表す箇所では現在完了が現れることもある。出来事じたいが未来的な意味をともなうそれらの例は、Nib. で 10 例以上見られる (金子 (2009 S. 112ff.))。この場合、そもそも出来事には過去性が認められない。
- 31) ほかに Nib.2310.3 や Nib.544.3 など。現在完了が推量的表現で用いられる箇所は 11 例見られる。金子 (2009 S. 116f.) を参照。
- 32) この意味で Zeman の Konstatiert wird das Faktum, dass seine bestimmte Verbalhandlung stattgefunden hat (Zeman 2012 S. 81) (「その一定の動詞行為がなされたという事実が確認される」) における das Faktum とは何かを問い改めなければならない。

テキスト

- Die Nibelungen*. Bearbeitet von Prof. Dr. P. Piper. Union Deutsche Verlagsgesellschaft, Leipzig, 1889.
- Das Nibelungenlied*. Nach der Ausgabe von K. Bartsch, herausgegeben von Helmut de Boor. 22. Auflage. F. A. Brockhaus, Mannheim, 1988.
- Das Nibelungenlied*. Mittelhochdeutscher Text und Übertragung. Herausgegeben, übersetzt und mit einem Anhang versehen von H. Brackert. Fischer Taschenbuch Verlag, Frankfurt am Main, 1993/1994. (1./2. Teil; Fischer Taschenbuch, Nr. 6038/6039)
- Das Nibelungenlied*. Mittelhochdeutsch / Neuhochdeutsch. Nach dem Text von Karl Bartsch und Helmut de Boor ins Neuhochdeutsche übersetzt und kommentiert von Siegfried Grosse. Philipp Reclam jun., Stuttgart, 1997. (Universal-Bibliothek Nr. 644)

参考文献

- Benecke, G. F. / Müller, M. / Zarncke, F.: *Mittelhochdeutsches Wörterbuch*. S. Hirzel, Stuttgart (Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1854–1866), 1990.
- Dal, I.: *Kurze deutsche Syntax*. 3. Aufl. Niemeyer, Tübingen, 1966.
- Eroms, H-W.: Einfache und expandierte Verbformen im frühen Deutsch. In: *Aspekte der Verbalgrammatik*. Hrsg. von L. Eichinger und O. Leirbukt. Olms, Hildesheim/Zürich/New York, 2000.

S. 9-34.

Helbig, G./Buscha, J.: *Deutsche Grammatik*. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht. Langenscheidt/Verlag Enzyklopädie, Leipzig/Berlin/München/Wien/Zürich/New York, 1994.

Kuroda, S.: *Die historische Entwicklung der Perfektbildungen im Deutschen*. Hermut Buske, Hamburg, 1999.

Leiss, E.: *Die Verbalkategorien im Deutschen. Ein Beitrag zur Theorie der sprachlichen Kategorisierung*. Walter de Gruyter, Berlin/New York, 1992.

Oubouzar, E.: Über die Ausbildung der zusammengesetzten Verbformen im deutschen Verbalsystem. In: *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur* 95, Halle, 1974. S. 5-96.

Paul, H.: *Deutsche Grammatik*. 4. Auflage. Bd. IV. VEB Max Niemeyer, Halle (Saale), 1958.

Paul, H.: *Mittelhochdeutsche Grammatik*. 25. Auflage. Neu bearbeitet von Thomas Klein, Hans-Joachim Solms und Klaus-Peter Wegera. Max Niemeyer, Tübingen, 2007.

Szczepaniak, R.: *Grammatikalisierung im Deutschen. Eine Einführung*. Gunter Narr, Tübingen, 2009.

Zeman, S.: Textuelle Schnittstellen als Grammatikalisierungskatalysatoren für Vergangenheitslesarten? In: *Schnittstellen*. Diskussionsforum Linguistik in Bayern Bavarian Working Papers in Linguistics 1, 2012. S. 74-88.

Zeman, S.: *Tempus und „Mündlichkeit“ im Mittelhochdeutschen. Zur Interdependenz grammatischer Perspektivensetzung und „historischer Mündlichkeit“ im Mittelhochdeutschen Tempussystem*. Berlin/New York: Walter de Gruyter, 2010.

金子哲太: 「現在完了の非過去の用法について — その通時的考察 —」 (『ドイツ文学論攷』 第51号, 2009. 109-128 頁.)

———: 『ドイツ語現在完了の語用論的意味 — その通時的考察 —』 (関西大学), 2013.

———: 「haben 完了に生じた「再分析」について — どのような意味的变化が生じたのか —」 (『独逸文学』 第59号, 2015. 95-121 頁.)

黒田享: 「完了形の文法化再考 — 文体の視点から —」 (『慶應義塾大学日吉紀要 ドイツ語学・文学』 第49号, 2012. 137-154 頁.)

嶋崎啓: 『ドイツ語現在完了形の歴史的変化』 (九州大学), 2004.